

共感を喚起させる力 —— 金子みすゞ詩論 ——

金井明子

はじめに

金子みすゞは「童謡詩人」である。

「童謡」と聞くとどうしても「子どものため」のものだと感じやすく、その歌の対象者も「子ども」に限定されていると思ひ込みやすい。少なくとも筆者自身もみすゞの詩が「童謡詩」だということを知った時には違和感を覚えたが、その違和感は考えているイメージとのずれから生じたものであった。

「童謡」というものは、歌わせる対象として「子ども」を掲げているに過ぎず、その内容からなにかを訴えかける対象は限定されていないのである。

みすゞの詩は、動物や植物、星や空・海などが題材として多く取り上げられ、子どもの口から発せられても違和感のないかわいらしいことばで謡われている。そしてその詩は、みすゞ生誕から一〇三年を過ぎた現在でも、さらに幅広い年代の人々の共感を得ているようである。

一九三〇年のみすゞ没後から五四年後の一九八四年に手帳に残された512編の詩が初の全集にまとめられ、九〇年代から「幻の童謡詩人」

として再評価されてきた。そして最近では読売新聞（平成十八年四月二十日付）にて、みすゞの父・庄之助の「他殺説を覆す記事が見つかった」と報じられ、ますます現代への浸透具合がうかがえる。

そこで本稿では、金子みすゞが現代人に受け入れられる要素はどんなものなのか、一例ではあるが、詩の特徴をまとめていくことで詩に込められたみすゞの思いに迫りたいと考える。

見えないものを想像させる

みすゞ詩の表現方法の一つとして「語り手が見えない」という特徴がある。詩の中には固有名詞がなく、「私」や「僕」ということばも出てこないのが、主役となるはずの「語り手が特定できない」ということである。もちろん「私」や「僕」として書かれている場合も、明白に特定できるとは言い難いが、それよりも曖昧になっていることは確かである。

しかし、「語り手が特定できない」ということは、言い換えれば誰でもその詩の語り手になることができるということにはならないだろ

うか。厳密に言えば、作者である金子みすゞがすべての詩の語り手になるわけであるが、その詩を読んでいる瞬間はその読者自身が語り手であり、主役になることができる。だからこそより感情移入することができ、その詩に込められた思いを読者自身で受け取ることができるのだらう。

本稿で取り上げる詩を見ていく前に比較しておきたいのが、前稿^③に掲載した「仲なほり^④」と「雀のかあさん^⑤」の詩である。

この二つの詩に共通するものは「心情を想像させる視点」が置かれていることである。この「心情を想像させる」ことと、後に見ていく「見えないものを想像させる」という点では共通する部分もあるかもしれない。しかし、決定的に異なる点が視座の置き方である。

「仲なほり」の語り手は「私」として明示されており、その「私」を視座として心情の変化が描かれている。「雀のかあさん」では、語り手は特定されていないものの、第三者に視座を置き、その目線で語られているのである。そして、これから掲げる詩では、視座は共通して不特定の語り手であるが、それは「私」として明示されているわけでもなく、第三者としての目線でもない。詩中に存在している「私」であることは確かだが、「私」であることはすでに前提となっていることから、読者は否応なくその詩の主人公になってしまうのである。つまり、詩中に埋没している「私」の思いが読者自身の思いへとすりかえられるのである。この点に注目して次からの詩をみてもらいたい。

(一)「生」と「死」

二つの異なる世界を取り上げる際に、比較的に使われやすいものが「生」と「死」ではないだろうか。「死」とは、実際に私たちがいる「生」の世界とは正反対に位置するものだが、生きている限り「死」の世界の正解は誰にもわからないことであるが、それが逆に想像しやすい世界になっているのかもしれない。

みすゞの詩の中で、私たち読み手側に「生」と「死」について問いつけ、また考えさせ、その世界を想像させているものがいくつかある。例えば、「金魚のお墓」「木」「大漁」などである。

金魚のお墓

暗い、さみしい、土のなか、
金魚はなにをみつめてる。
夏のお池の藻の花と、
揺れる光のまぼろしを。

静かな、静かな、土のなか、
金魚はなにをきいてゐる。
そつと落葉の上をゆく、
夜のしぐれのあしおとを。

冷たい、冷たい、土のなか、

金魚はなにをおもつてる。

金魚屋の荷のなかにゐた、

むかしの、むかしの、友だちを。

(II-160)

「金魚のお墓」という題名からもわかるように、まずは死んでしまった金魚を「誰か」が土の中へ埋めている情景はすぐに思い浮かぶだろう。そしてその「誰か」を考えると子どもの姿を想像する人は多いはずである。しかし、この詩の中には子どもを提示することは書かれていない。

ではなぜ、子どもの姿を想像してしまうのだろうか。

金魚のためのお墓を作り、その金魚に思いを馳せるといふ行動が、まさに幼い頃に誰もが一度は経験しているようなどこか懐かしささえも感じさせる一つの出来事だからかもしれない。そして、私たち人間以外の動物や植物、生命のないおもちゃや人形などの気持ちを考え、機嫌を伺うことがいつのまにか子どもの行為として位置づけられていることもあげられるだろう。しかし、童謡特有のかわいらしい口調や、子どもを象徴する情景について釣られてしまいがちだが、語り手は大人にも子どもにもどちらにも限定されていないのである。

この詩では、二つの世界が描かれ、視座となる不特定の語り手の世界とは別に、埋められた金魚の世界を描いているということが特徴となっている。つまり、「死」の中にある「生」の世界が描かれているのである。

本来「死」の世界というものは、「生」の世界にいる側からは目にすることができない。そうであるとすれば、その世界を描くには想像することである。「生」の世界にいる視座となる語り手が、死んでしまった金魚を埋めながらその金魚の気持ちを想像することが「生」とは反対の位置にある「死」の世界をも想像することになっている。一つの固定された視座から語り手が注ぐ視点対象は二つあるが、その視点対象となるそのものの新しい見方を想像することをみずぐは提案しているのである。

木

お花が散つて

実が熟れて、

その実が落ちて

葉が落ちて、

それから芽が出て

花が咲く。

さうして何べん

まはつたら、

この木は御用が

すむか知ら。

(I-90)

(二)「表」と「裏」

本稿でのテーマは、「見えないものを想像させる」である。

「見えないもの」の裏には「見えるもの」があり、「見えるもの」の裏には必ず「見えないもの」がある。(一)で取り上げた「生」と「死」も言い換えれば「表」と「裏」になるが、ここでは少し観点を變えて、「表」では、普段私たちが目にすることが出来るもの、または日常的に当たり前だと思われていることが描かれ、「裏」では、その「表」の現象になんらかの影響を与えているものとされている詩を見ていきたい。つまり、普段、見えない・知られていない「裏」の世界を発見させ、想像させてくれるものが次からの詩である。

空と海

春の空はひかる、

絹のよにひかる、

なんでなんでひかる。

なかのお屋が

透くからよ。

春の海はひかる、

貝のよにひかる、

なんでなんでひかる。

なかに真珠が

あるからよ。

(II-266)

一連と三連が共通して「なんでなんで」という幼い子どもらしい口調の問いかけとなり、その問いかけに対して「二連と四連が「くからよ。」と母親らしい口調で答える形式となっている。しかし、「金魚のお墓」と同じく語り手は特定されていないので、読み手側はどちらの立場にもなれるはずだが、このような問いかける形式では読み手側は自然と疑問をもつ立場になりやすく、新しいことを教えてもらう側になるだろう。

「空はなんでひかる?」「海はなんでひかる?」という極めて単純な質問であり、「空」と「海」という私たちが普段目にすることができるものであることから、子どもの口調で語られている情景は「表」の世界であるということが出来る。それとは反対に、答えとされている二連と四連では、そのままの状況では直接見ることができないが、中に隠されていると語っていることから「裏」の世界ということになる。

「空」と「海」がひかっている原因の真実とは別に、ここでの答えは一つではない。この答えが間違っているなどというのではなく、き

と答えはたくさんあるに違いない。たとえ「星」と「真珠」ではなくても詩は成立するのである。ではなぜ、みずゞはこの答えを選んだのだろうか。

例えば、「空」と「海」が「ひかっている」ということから、単純に考えると太陽のひかりが思い浮かぶ。「空」には常に太陽があり、「海」はいつでも太陽に照らされているはずなので、太陽のひかりによって「空」と「海」がひかることには間違いない。

しかし、この太陽のひかりではここでは不正解になる。なぜなら、私たちが目に行うことができる「表」の世界のものだからである。

この詩では、表面的なものの裏に表面的なものがあったては成立しないのである。三連・四連のことばにもあるように、「なか」に存在していなければならないのだ。「星」は夜になれば空に輝き直接見ることができ、ひかっている「空」と同時に眺めることはできないだろう。そして、「海」を目の前で眺めていても、たとえ気持ちよく泳いだとしても、必ずしも「真珠」を見つけないことはできないだろう。しかし、それらは確実に存在し、ひかりを放っているのである。

意識を向けて探さなければ見つからないものであっても、きつといつの日も奥底で輝いているだろうものを見透かすという視点を通じて、目に見えないものを想像する力を見つけて出してくれているのである。

最後に、ここでは「表」と「裏」という二つの世界として線を引いてきたが、「裏」の世界が「表」の世界の単なる控えとして存在しているということは決して言っていない。確かに「なか」で輝くことによって「表」の世界を照らし、支えとなっていることは確かであるが、

その存在そのものは暗くもなく地味でもない。「表」は「裏」に支えられ、また同じように「裏」も「表」に支えられているからこそ、二つの世界が共存できるのである。そしてどちらも輝きを放つことができるのである。詩の中にある「絹のよ(う)に」と「貝のよ(う)に」と強調されていることばがその証拠である。

月日貝

西のお空は

あかね色、

あかいお日さま

海のなか。

東のお空

真珠いろ、

まるい、黄色い

お月さま。

日ぐれに落ちた

お日さまと、

夜あけに沈む

お月さま、

逢うたは深い

海の底。

ある日

漁夫にひろはれた、

赤とうす黄の

月日貝。 (I—24)

(三)「開」と「閉」

(一)の「生」と「死」で取り上げた詩の中での「見えないもの」とは、自分自身以外を対象とするものへの気持ちを想像するものであり、(二)の「表」と「裏」で取り上げてきた詩の中での「見えないもの」とは、肉眼ではなかなか目に見えないものを想像するということで、比較的現実的なものを想像させる詩であった。

次の詩は、一変してとても幻想的な詩であり、まさに私たちに想像することを楽しませてくれるような世界が描かれている。

見えないもの

ねんねした間になにかがある。

うすもいろの花びらが、

お床の上に降り積り、

お目々さませば、ふと消える。

誰もみたものないけれど、

誰がうそだといひませう。

まばたきするまに何がある。

白い天馬が翅のべて、

白羽の矢よりもまだ早く、

青いお空をすぎてゆく。

誰もみたものないけれど、

誰がうそだといへませう。

(I—235)

「ねんね」と「まばたき」という誰もが日常生活の中で、自然とやり過ぎすものが視点の対象として取り上げられている。その「ねんねした間」と「まばたきするま」というのは、目を閉じている間のことであるが、その目を閉じている間には、ふとんの上に花びらが降り積っていたり、天馬が青い空を駆け抜けていたりしているのかもしれないと考えている。そして、目を閉じている時間が長くとも、それが一瞬であろうとも、そういう世界があるのかもしれないと想像させているのである。日常生活の裏側には、もしかしたら特別な世界があるのかもしれない、というみずみず独自の新しい見方を発見している詩である。

私たちの日常生活の中で、例えば、ある一つのものを別の角度から見てみたり、いつもとは違う道を歩いたりすることで、新たな発見をしたり新鮮な気分になることもあるだろう。それと同じような気分や驚きを与えてくれる力がみずゞの詩にはあるのかもしれない。

不思議

私は不思議でたまらない、
黒い雲からふる雨が、
銀にひかつてゐることが。

私は不思議でたまらない、
青い桑の葉食べてゐる、
蚕が白くなることが。

私は不思議でたまらない、
たれもいちぢらぬ夕顔が、
ひとりではらりと開くのが。

私は不思議でたまらない、
誰にきいても笑つて、
あたりまへだ、といふことが。

(III—167)

おわりに

不特定の語り手が視座となり軸となり、内容を展開させているのが本稿で取り上げた詩の特徴である。語り手が特定されていないことによつて読者自身が語り手となり視座となることから、違和感なく自然にみずゞの視点へと導かれているのである。そして、みずゞが想像する見えない世界を私たちも同じように想像することができる。同時に、その想像そのものが読み手側へ新鮮な新しい発見として受け入れられ、よりみずゞの世界に引き込まれていると考えられる。

そして、このような特徴が単純に「童謡」詩として片付けていいものか、疑問を持ってしまふ所以であるのかもしれない。これについてはまた稿を改めたい。

注

(1) どうよう【童謡】①童心を表現した、子供のための歌や詩。

②民間に伝えられてきた、子供のうたう歌。わらべうた。

③子供が作った歌や詩。

〔岩波 国語辞典 第六版〕岩波書店、二〇〇〇)

(2) 童謡詩人・金子みずゞ(一九〇三〜三〇)が幼時に亡くした父、庄之助氏は「中国で殺害された」という通説を覆し、実際は病死だったことを伝える当時の新聞記事が見つかった。父の非業の死はみずゞの「薄幸」イメージを強めていたが「遺族やファンならホッとすると、関係者はこの発見を喜んでゐる。

- (3) 拙稿「視点の多様性から見る金子みすゞの表現」(『目白大学文学・言語学研究』第二号、二〇〇六・一)
- (4) 「仲なほり」を以下に示す。
 げんげのあぜみち、春がすみ、／むかうにあの子が立つてゐた。／あの子はげんげを持つてゐた、／私も、げんげを摘んでゐた。／あの子が笑ふ、と、気がつけば、／私も知らずに笑つてた。／げんげのあぜみち、春がすみ、／ピイチク雲雀が啼いてゐた。(II-226)
- (5) 「雀のかあさん」を以下に示す。
 子供が／子雀／つかまへた。／その子の／かあさん／笑つてた。／／雀の／かあさん／それみてた。／／お屋根で／鳴かずに／それ見てた。(I-27)

参考文献

- ・金子みすゞ著『金子みすゞ童謡集・わたしと小鳥とすずと』(JULA出版局、一九八四・八)
- ・矢崎節夫著『童謡詩人金子みすゞの生涯』(JULA出版局、一九九三・二)
- ・酒井大岳著『金子みすゞの詩を生きる』(JULA出版局、一九九四・八)
- ・島田陽子著『金子みすゞへの旅』(編集工房ノア、一九九五・六)
- ・藤本恵「金子みすゞと大正期児童文学」―空いろの花のレジスタンス」(お茶の水女子大学国語国文学会『国文 第89号』一九九八・七)
- ・西口徹編『文藝別冊 金子みすゞ』(河出書房新社、二〇〇〇・二)
- ・詩と詩論研究会編『金子みすゞ 詩と真実』(勉誠出版、二〇〇二・七)
- ・上山大峻・外松太恵子著『金子みすゞ いのちのうた・1』(JULA出版局、二〇〇二・十二)
- ・詩と詩論研究会編『金子みすゞ 花と海と空の詩』(勉誠出版、二〇〇三・二)
- ・藤本恵「金子みすゞの批評性 ―〈お伽噺〉をめぐる―」(『昭和文学研

- 究 第46集』二〇〇三・三)
- ・湯原公浩編『別冊太陽 日本のこころ一二三 生誕一〇〇年記念 金子みすゞ』(平凡社、二〇〇三・四)
 - ・金井明子「みすゞに向き合う ―心に迫る見えないしかけ―」(二〇〇三年度実践女子大学卒業論文)
 - ・詩と詩論研究会編『金子みすゞ 美しさと哀しみの詩』(勉誠出版、二〇〇四・七)

附記

本稿では原文の引用に際して、左記のような処理をした。

- 一、金子みすゞの詩の引用は、『新装版 金子みすゞ全集』(I・美しい町「II・空のかあさま」「III・さみしい王女」JULA出版局、一九八四・八)に拠る。
- 二、ただし、かなづかいは旧かなづかひのまま、漢字は新字体に改めた。
- 三、また、ルビは省略した。
- 四、引用する詩の左下には、全集巻号とページ数を併記しておく。

*例えば、「金魚のお墓」の左下に「(II-160)」と書かれていれば、『新装版 金子みすゞ全集「II・空のかあさま」の160ページに掲載されている詩ということになる。